

ライブニッツのリスク管理

佐々木能章

はじめに

ライブニッツは秩序の人だ。自然を探究する方法も、諸学をまとめる普遍学の理念も、社会的組織の建設の構想も、いずれも秩序の体現を目指すものであった。この秩序を目指す方向の集大成こそが「予定調和」と呼ばれるものである。ここには偶発的な出来事は存在しないのだろうか。もしあらゆることが予め決まっていて、何一つとして遺漏はなくすべてが密接につながりあっているのならば、予想外の出来事や不確定な事象などは存在するはずがないことになる。しかし世界を完成された姿として理解するのは、いわば神の目からであって、現実には時を刻みながら生きている人間にとっては、世界は未知と不確定に満ちた出来事の連続でしかない。このことは、実践の場にどっぷりと漬かっていたライブニッツにとっては自明でさえある。それでもライブニッツは、人間の立場から秩序への信頼を抱き続けていた。このようなライブニッツの思考法を、「リスク」という視点で捉え返してみたい⁽¹⁾。

1. 「リスク」概観

リスクは、ある意味で秩序の乱れであり、多くの場合、避けたくても避け難いものとして存在するものである。こうした事態は、災害や病気のように主として自然的な原因によるものもあれば、建築、土木などの工学的領域や医療、薬品、食料など人工的産物に起因するもの、あるいは政治、経済、教育など社会的な場面のもの、さらに以上が複合した環境や情報に関わるものなど、種類は無数にある。いずれの場合にも、予想や期待したことが思い通りの結果につながらない時の不調和がリスクとして実感させられる。ここには、人間の能力の限界という問題が大きく関わるが、決してそれだけでもない。また、リスクに対処する方法として、知識の問題や社会制度の問題などが互いに関連することになる。現在、リスク論は多くの分野で論じられ、それらを総合的に検討するための「リスク学」の構築さえもが試みられている。しかし現況では、リスクそれ自体の定義からして分野ごとにずれがあり、したがってまた、リスクの扱い方もばらばらといったありさまであって、総合化にはほど遠い。そこに立ちはだかる難問の一つは、おそらく分野間の方法論や学問理念の相違である。

この点を図らずも明らかにしたのが、2007年に岩波書店が刊行した『リスク学入門』全5巻のシリーズである。ここでは、経済学、法学、社会学、科学技術政策の各分野においてリスクがどのように扱われるかが論じられ、現段階でのリスク論の多面的な姿が示されている。この第1巻は、シリーズ全体の総論に当たるもので、冒頭の座談会では各巻の編者が一堂に会して共同討論を行っている。各編者たちがそれぞれの学問分野の代表者というわけもないだろうが、おおまかには反映されていると見ることはできるはずである。彼らはリスク学が総合的に構築されることに意欲的であることは十分伝わるが、それ以上に浮かび上がるのが、皮肉なことに、分野によってリスク理解が異なることによる足並みの乱れである。この手の座談会ではきわめて異例なことながら、意見の対立が融和や調停に向かうことなく、陰悪なムードが持続し、議論の着地点を見失わせている。リスク学が抱える根本的なリスクだとしか言いようがない。

例えば、全巻の総括的まとめ役である今田高俊（社会学）は、「リスクとは『人が何かをおこなった場合にその行為に伴って生じる危険』を意味するのが一般的です。そこには、事故や災害など自己が責任を負いきれない出来事をあらわす危険(danger)や人間の力では避けることのできないハザード(hazard)とは異なり、自己の責任において引き受ける危険という意味合いがあります。社会学的にリスクを定義する場合には、ある程度自己の意思決定、ないしそれに伴う責任において引き受ける危険と位置づけられています。」と言うが（橋木俊詔他 2007, 12 頁）、即座に橋木俊詔（経済学）は、リスクは昔からあるものだし、人為的原因のみで起こるのでもないと反論し、さらにリスクにはプラスの面もある、と言う。益永茂樹（科学技術論）は、建築や土木などの工学では、リスクは危害発生の頻度と程度の積だと定義づけ、そこには自然災害も含まれるとする。ここからだけでも、そもそも「リスク」をどう定義づけるかという出発点で食い違いがあることがわかる。ではそれらを統合したリスク理解は可能なのかというと、益永は「類似の事象によるリスクの評価は、容易かつ正確にできますが、違った事象によるリスクを共通の評価指標にのせることは困難かつ不正確になりやすい。限界をわきまえつつ、一般の人々の理解と支持を得ながら進んでいく必要があると言える」と否定的に述べるにとどまる(前掲書 49 頁)。

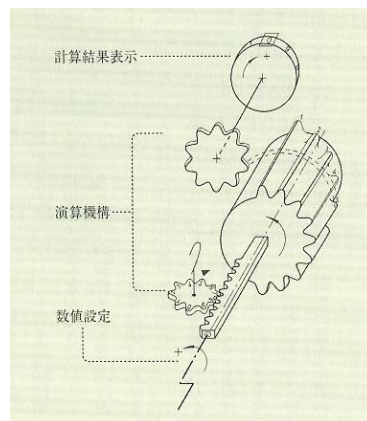
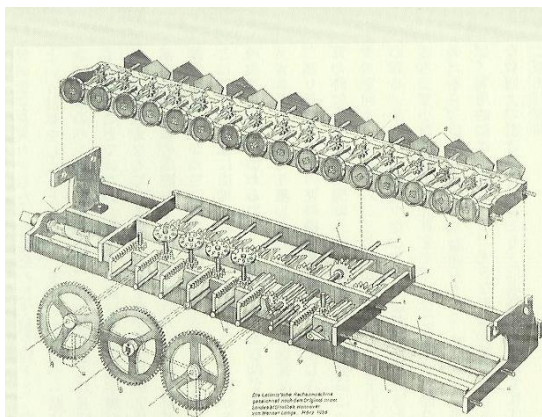
こうした事態の解決を直接ライブニッツに求めることなどできるわけがない。しかしながら、ライブニッツの多面にわたる活動とりわけ実践に関わる場面を、リスクという視点で理解し直し、その特徴を読み解くことで、リスク論を考えるためのヒントを得ることを試みたい。

2. 計算外の計算 計算機作成

ライプニッツと計算機の関係は長く深い。若い頃から計算機の作成に取り組み、パリやロンドンで試作品を披露している。その後も最晩年に至るまで改良を繰り返していた。ライプニッツ以前にも計算機は多種あり、中でもパスカルのは名高い。パスカル考案の計算機は歯車で連結された円盤を操作することによって加法と減法の計算をするものである。乗除法は原理的には加除法の繰り返しによってなされるため簡便とはいえない。ライプニッツの機械は乗除法を簡便かつ迅速に行うことを目指していた。その最大の工夫は「段違い歯車」の考案にある⁽²⁾。

パスカルの計算機は数字が表示される円盤そのものを操作し、計算の結果もまた円盤の数字によって直接示されている。加法で繰り上がりが生じる時には次の桁の円盤も同時に回転する。そのため、多数の桁が一斉に繰り上がる場合には動きが重くなる。実際にパスカル自身の試作品ではこの問題がうまく解決できなかった。しかしある時計職人がパスカルのアイデアを盗んで作った「模造品」は軽快に作動したらしい。なぜなら、そのような機械の難点を熟知している技術者は歯車が噛みあう部分に微妙な「あそび」を仕組んでいたため、軽快さが確保されていたからである。

ライプニッツの計算機は、表示部と計算機構が一応は独立している。そこに介在するのが「段違い歯車」である。文字だけでは説明しにくいので、計算すべき数字を表示部に設定してから段違い歯車を動かすためのハンドルを回せば別の表示窓に計算結果が自動的に示される。この計算機はライプニッツ存命中には細部の調整がなかなか詰められずにいたが、その後いくつかの改良が加えられ原理的にはライプニッツの考案が基礎となって実用化され、20世紀後半に電子計算機が普及するまでは一般的に使用されていた。ライプニッツのアイデアが実現した数少ない例の一つである。



(左図：ライプニッツ考案の計算機の内部構造 右図：段違い歯車の仕組)

計算機は、本来リスクとは無縁であるはずのものである。ライプニッツに先立ち同じく17世紀に開発された計算尺は原理的にアナログであるため概数しか表示できず、誤差という意味でのリスクを内包しているとも言えるが、パスカルやライプニッツの計算機は原理的にデジタルであり、曖昧さを入れる余地はない。しかもライプニッツにとって、計算は単に実用上の操作としてのみならず、形而上学的な存在論にも関わるものであった。ケプラーにも通じる数学的合理性をライプニッツもまた存在の根底におき、最善世界の理念もこれまた形而上学的な計算に基づくものであった。別の言い方をすればこれらの計算は神が行うものであり、ライプニッツにとっての神はここに一切のリスクを介入させることもない。ではどこにリスクの余地があるかという、それは工学的な場面に見ることができる。もっと簡単に言えば、ものつくりの場面である。およそ哲学者らしからぬ場面ではあるが、ライプニッツが終生取り組んでいた課題であった³⁾。

工学という分野は、数理的な厳密さの論理とは必ずしも一致しない。期待される結果が見込まれる程度の精度があれば足りるし、それ以上を求めることは経費の点からも無駄である。むしろ必要なのは、期待から外れそうになった時に修正できるようなシステムを予め組み込んでおくことである。天変地異や偶発的事態に対処するための方策を立てておくことは、建築や土木や製造の分野では当たり前の技術である。人間が操作するということもまた重要なリスク要因となっていて、同じ規格の製品であってもユーザーによって違対応がなされることが予め設計に組み込まれていないと、直ちに操作ミス誘引する。多くの機械の操作部分に「あそび」があるのはその対処法の一つである。

ライプニッツの工夫になる段違い歯車は、工学的なリスクへのささやかながら顕著な対処法であった。9段階に長さの異なる段違いの歯は円周部分の半分しかなく、残りの部分は平滑になっていて動力を伝えない。つまりここが「あそび」になっている。パスカル自身の試作計算機は「あそび」不足でうまく作動せず、職人の微妙な業を必要としていたのだが、ライプニッツの計算機は構造的に「あそび」が仕込まれていて、職人芸すら不要である。

この「あそび」は機械内部の構造に組み込まれたものであって人間の操作に直接関わるものではないので、リスクは人為の結果に関わるものとの定義からすれば厳密にはリスクとは言えないのかもしれない。しかし、理屈の上では不要な部分（つまり歯がついていない平滑部分）が結果的にはなめらかな動きをもたらすことになっていて、そのことが人間の操作ミスの可能性を軽減しているという点では、リスクへの対処法となっている。

実は計算機の製作・改良において、ライプニッツは全く違った種類のリスクに直面していながら、それへの対策はなされていなかった。それは人というリスクである。理屈が立

ち、設計図ができ上がれば、図面通りに職人が作ってくれるものとばかり思っていたライブニッツは、その思惑がいつも外れることを嘆いている。結局それが理由となって、生前には完成の域にまで達することはなかった。他人が自分の期待通りには必ずしも動いてくれないことは人生の常である。この面でのリスクは、ライブニッツが方々で出くわすものである。とはいえ、段違い歯車の原理は有効であったため、ライブニッツの死後にも技術的な改良が加えられて実用化し、今日の電子的な計算機（コンピューター）が普及するまで世界中で用いられていた。これはこれで、予想外の出来事であった。

3. 風水の難 鉱山開発の技術問題

ライブニッツの哲学者としての主要作品の一つである『形而上学叙説』が書かれた 1686 年の前後、ライブニッツはかなり多忙な時期であった。1678 年から取り組んでいたハルツの鉱山開発（ハルツはハノーファーからは約 100 キロの距離にある山脈でハノーファー侯領地となっている。銀などを産出する鉱山として古くから知られていた。）の現場責任者として、度々現地を訪れている。滞在期間は通算すれば 165 週にも及ぶ。現地では、技術上のさまざまな難問に対処しなければならず、さらに職人等との人間的な軋轢も悩みの種であった。その宿泊施設に滞在中、ライブニッツは数学の諸問題について考察をめぐらし、教会合同のプランを練っていた。そしてそのさなかに『形而上学叙説』が書かれたのである。この著作の執筆は比較的短期間にハルツで書かれたことが知られているが、十分な資料も手許にないまま書き上げられたはずである。そしてこの作品の表題をもとに、アルノーとのやり取りが開始される。互いに数十通に及ぶこの書簡集は、ライブニッツ研究にとって第一級の価値を持っている。

現場監督ライブニッツを悩ませた最大の問題は純粋に技術的なものであった。鉱脈の掘削の際にはどうしても地下水が湧出してしまう。これを排水するためのポンプの動力の確保が難題であった。人間や動物の力によるのでは何かと不都合であるため、自然力としての水力か風力の利用が図られる。しかしどちらも安定さに欠ける。水力を生み出す川の流れは季節や天候により変化するし、風力もたえず変わっている。自然の力の予想不能な変化は安定した動力供給という課題にとってはリスク要因となる。両者を巧みに組み合わせることで欠点を補うようなシステムを構築することがライブニッツの手にかかっていた。これこそが現場監督ライブニッツのリスク管理の手腕が問われるところである⁽⁴⁾。

ライブニッツのハルツ計画にはいくつかの局面があるのだが、ここでは 1680 年から取り組まれた水力と風力の連動システムを見てみよう。これ以前には、鉱山に沿って流れる自然川の水流を用いた水車や要所に設置された風車の力でそれぞれ独立に揚水ポンプを動か

していたが、ライブニッツは鉱山全体を一つのエネルギー循環システムとして考え直した。この基本構造は、最下部の溜池と下部貯水池と上部貯水池、そしてこの上部貯水池から各採掘所を回って最終的には溜池にまで戻る水路からなる。並行して流れる自然川から分岐されて一旦最下部の溜池に貯められた水は、風車で動くポンプによって下部貯水池にまで揚げられる、さらにまた風車によって上部貯水池にまで揚げられる。ここから水路にそって流れた水は、標高順に採掘所をまわり、その度に水車を動かして坑道の揚水ポンプの動力となる。坑道の揚水ポンプの動力は水車のみが供給する。風車の役割は、水車を回す水を貯水池まで揚げることにある。つまり風車は坑道の揚水ポンプに対しては間接的に働くだけである。水はまた最初の溜池に戻り、同じことを繰り返す。風力は不安定であっても、動く時に貯水池に水を揚げておけば、エネルギーを貯めておくことができる。貯水池が二段階あることによって、不安定さはさらに安定したものとなる。上部貯水池には常に十分な水量が確保され、ここから一定量の水を連続的に水路に供することができる。自然川の水流を直接利用した水車であれば安定性は失われるが、システム化された水路から安定供給される水流によって、各坑道口にある水車は常にほぼ一定の動力を受けて作動する。

このシステムはリスク管理という点でよく考えられたものである。水力、風力の不安定さは、安定した動力を得ようとする意図からすればリスク要因として理解される。しかも水力の不安定さはやや長期的な周期であるのに対し、風力はきわめて短期的に変化する。どちらもそれだけでは安定性を確保するのが難しい。これを一つのシステムに組み込むことで、両者の不安定さが相殺されるというのがこの計画の目論見である。自然の力を規則的なものとして利用するためのシステムであった。もう一つリスク管理として見ておきたいのは、貯水池を二段階設けたことの意味である。理屈で考えれば、貯水池は最上部に一つあれば足りるはずである。しかし当時の土木技術からすれば大きなダム建設は無理であったろう。堤が決壊すれば元の本阿弥となる。それを避ける工夫が二段階の貯水池ということになる。これにより、多少の渇水が続いても水車を動かし続けることができる。逆に大雨の時には貯水池や水路から自然川へ放流することで工作物の破壊を防ぐことができる。これもまた、リスク管理として評価できることである。

とはいえ、ライブニッツが試みた無数の事業や計画がそうであるように、ハルツ計画も最終的には失敗に終わる。技術的な改良の試みはたえず繰り返され、上で述べたエネルギーの供給システムの開発以外にも、巻き上げ機械の構造などに多くのアイデアを出し続け、そのうちの一部は実用的なものにもなっているのだが、計画の全体が採算の面で引きあわないこともあり、国王命令で中止となった。採掘現場から出土した化石から地質学の研究が始まったという「おまけ」はあったものの、計画の全体は不首尾に終わった。

この時期のライプニッツの計画についてエルスターは次のように評している。「自然の一見不規則な力を規則的で合理的なものにすることにライプニッツの全努力が傾けられていた。この哲学者は、どんなに不規則に見えるように気ままに手で描いた線でも、ある規則と定義に還元できないものはないということを知っていた。この技術者は、自然の力で規則的な流れに還元できないものはあり得ないことを証明しようとしている。」⁽⁵⁾ だが、ここで言う哲学者と技術者とでは微妙な違いがある。フリーハンドで書きたいびつな線であってもその根底に規則性があるということは、規則性は人間の認識や行為の彼方にあるということであり哲学者はそれを言わば観想(theorein)する。これに対し「技術者」は、技術を用いることによって規則性を現出させることにその役割があることになる。技術を行使する対象である自然にはそれに固有の規則性がある。人間はその自然が持っている秩序を損なうことなくそこから人間にとって都合のよい形で力を引き出す。それが可能になるのは規則性が自然と技術の根底に共通していると確信しているからである。しかも技術は、観想とは異なり何らかの成果を生み出すものでなければならない。自然はそれ自体では必ずしも人間に都合のよい形で現れてくれはしない。むしろ多くの場合、扱いにくいものとして立ち現れる。予想や期待通りになってくれない自然は人間から見ればリスクが大きい。それを手なづけてこそその技術であり、リスク管理でもある。ライプニッツは観想を排除して技術を称揚するのではない。「理論と実践 *theoria cum praxi*」をスローガンとしたライプニッツは、理論に裏打ちされた実践を目指していた。ただの哲学者ではなかったということだ。

しかし、ライプニッツはここでまたしても、別種のリスクに直面することになる。純粹に技術的なリスクへの対処には万全を尽くそうとしていたとしても、人間にひそむリスクまでには思いが至らなかったのだろうか。ハルツ計画が失敗に終わった原因は、期待したようには機械が作動しないといった技術的な問題が主だとしても、その機械を動かす人間の扱いに関してライプニッツに配慮が欠けていた点も大きい。現場の技術者や職員との軋轢が不信を生み、それが解消されないままに増大して、最終段階では対立さえ生じてしまった。こうなると、もはや理屈や理念の問題ではないし、採算でどうなるものでもない。後で述べるように、内政や外交の場面では政治家としての深慮遠謀が働くのだが、現場監督の立場では思うように人の心の動きを読むことができなかった。責めを負うべきはライプニッツ自身であった。予期せぬリスクがひそんでいたということか、この面でライプニッツは全くの無防備であったと言わざるを得ない。だがそのことをもって、鉱山全体にめぐらせた水の循環システムのアイデアの意義が失われるわけではあるまい。ハルツのシステムが全世界のオプティミスティックな構想の縮図である、といっでは言いすぎだろうが、

底を流れる発想は同じであった。

4. 不運の共有 保険の思想

第三の場面として、ライプニッツの保険論を取り上げたい⁶⁾。保険の考え方は古くからあったが、ある意味では近代社会の産物である。古くからあったというのは、不運に見舞われた人を集団で助けるということで、寡婦扶助制度や、遭難船舶への補償制度などの各種共済制度がこれにあたる。近代社会の産物というのは、補償の財源に経済的な合理性が組み込まれ、保険事業が企業体として成立したということである。

1680 年代に書かれた『保険論』でライプニッツは次のように述べる。

「共和国あるいは市民社会における公平は、偶発事がいわば人々に共通のものとなり、互いに助け合って担うことを必要としている。偶発事であれば、あるメンバーが神の摂理に従って他のメンバーの負担を引き受けることになるからである。かくして、[嵐に遭った] 商船を軽くするために投棄された船荷は共同の費用から支払われるべきだということが賢明にもロードスの投棄法によって制定されていたのと同じように、共和国全体もいわば一艘の商船と見なしてよい。……わずかな者だけが不運に見舞われそれ以外の者は無事だというのでは不公平である。各商社では、損失も利得も共同で考えられているのだから、それが千も集まった大きな社会においても、損失利得は単に少数の者にだけでなく、共通の福祉に方向づけられ、ある者が他の者の損失を、心の動揺や過敏さとは別に、見て取るべきである。」(A. IV-3. S.424-425)

ここにはライプニッツの保険思想の核心が述べられている。ライプニッツの保険思想は、近代保険との関連で考えるといくつかの特徴が指摘できる。第一に、近代保険の成立の必要条件ともいえるべき保険金の合理的運用の考え方が明確に表れている。パスカル、フェルマーにより開始された確率論はベルヌーイ一族により一層精密化され、現在の保険数学を生み出す。ライプニッツと多数の書簡を交わしたヤコブ・ベルヌーイの「大数の法則」に基づいて、保険金の管理を確実に行うならば、単なる慈善事業ではない、一種の企業的な保険制度の安定した合理的運営が可能となる。神ならざる人間には、不確かな事態（リスク）を予知できない。そこで、統計的手法を用いた確率論によって偶発事（リスク）の発生頻度ならびに被害の程度を見積もる。そして、不利益（リスク）を保険の参加者全員で共有する。リスクを数学的に理解することによってこの共有は合理的な裏付けを有することになる。

第二に、ライプニッツの議論には、近代資本主義の精神が見て取れる。すでに古代ギリシアでは遭難した船の損害を共同で負担することを取り決めた法律があったことに触れた上で、市民社会についても同じように考えるべきだという提案である。商船や商社の企てがリスクを伴うものであることはいうまでもない。それは冒さなくても良い危険をあえて承知の上で利得を求める進取の意気に発するものであり、資本主義に基づく市場経済の発展の一つの局面でもある。ライプニッツの考え方はこの発想と軌を一にしている。

第三に、保険制度が経済的合理性に支えられているとはいえ、その基本には、社会の構成メンバー全体が不運を背負っていくという、いわば共済の精神があることである。これは近代的保険というよりはむしろ原始的な保険思想に基づくものである⁷⁾。つまりは、単なる数学的合理性だけではなく、共同体のメンバーであるとの自覚が各構成員に求められているということである。ライプニッツは保険論の最後を、「ドイツでは人は『終身の民兵』として各人が自分の国の主人となるべく決意すべきであると思われる。」と締め括っている。それは、「小さい神」としての人間だからこそ可能でもある。だが人間はどうしても自分のことを中心に考えてしまう。制度の崩壊はそこから始まる。さらに、制度の適切な運営についてもライプニッツは触れている。集められた資金が他の目的に流用されると制度そのものが危機に瀕してしまう。まるで現代の保険や年金の制度的脆弱性を予見していたかのようである。

ここで提唱された保険制度は、決してライプニッツの創意によるものではない。むしろ時代の流れがそうした制度を生み出すものとなっただけかもしれない。ただそれでも、そこに数学的感覚と政治家の感覚とを合わせ持った愛国者がいたからこそ、制度設計が可能となったのであり、それは、最終的には人類の幸福を目指すという普遍学の理念とも合致し、未来への希望を決して失うことのなかったオプティミズムの哲学者だからこそ描くことのできた設計図だったのである。残念なことにその理念の具体化にはまだまだ時間が必要であった。

5. 政治におけるペシミズム

ライプニッツの本業は政治家であった。その政治家が、市民社会や国家という場面で取り組んだ諸問題を、リスク管理という視点で理解してみたい。

ライプニッツは、国家の役割として安全を基本に考えていた。

国家という大きな社会の目的は共通の安全(sûreté)であるが、人はその中で安全以上のものを獲得することができる。それは幸福である。……安全はともかく不可欠なもの

であり、安全なくして福祉はない。(ファレゾー宛、1705年7月8日 K.IX.143)

ではこの目的にとっていかなる国家形態が望ましいか。この点で、すでにホッブズにより、そしてまたロックにより提唱された社会契約説に対し、ライプニッツは冷ややかだ。契約説は人間の自然的権利の平等を説くが、実際はそうではないからだと言う。社会契約説が理念としての自然権を唱えたのに対し、ライプニッツはきわめて現実的である。「大海に浮かぶ船に人々が乗り合わせていたとして、海事に疎い者が船頭になれるわけがない。最も賢い者が操るのが自然の理というものだ。」(トマス・バーネット宛、1699年頃 GP, III-264) 国家は何よりも理性の帝国、つまり理性の支配が行き渡ったものであることを目指す。そこで、君主制、貴族制、民主制を比較し、ライプニッツは最終的には君主制を最上とする。「君主の絶対的権力の方が個人の自由によるよりも安定性がある。僭主制や無政府主義の侵入を防ぐのに、これにまさるものはない。」(同宛、1700年頃 GP.III-277-78) もちろん、君主であれば誰でもよいというわけにはいかない。すぐれた徳を生来具えその点で臣下に優る君主こそが望ましいと言う。理想とする国家支配の論理は、啓蒙専制君主制であった。つまり、名君が社会を導くというものである。このような君主像をライプニッツはハノーファー王家に仕え始めてすぐに描いていた。(『君主像』1679年、K.IV-459-87)そこには君主を育成する教育の重要性も指摘されている。

国家の危機は内外からさまざまな形でやって来る。これに適切に対処し将来を見据えることができるのは、すぐれた指導者をおいて他にないとライプニッツは考えていた。とはいえ、いくら啓蒙的であったとしても、専制君主制に期待する議論は今更通用するはずもない。宮廷人だったからこそその考え方だとも言えようが、ライプニッツの議論を現在文字通りに受け止めることはできない。しかし、国家のあり方を考えるライプニッツの目はまたしても現実的であった。国家の危機は外からやって来るものばかりではない。国内に原因を持つものもある。その中でライプニッツが最も懸念していたのは、国民の道徳性の後退であった。

英国民は、今や国の内外に心配の種を持っていない。しかし懸念すべきなのは、道徳が退廃し人が感情の虜になっていることだ。……いま何よりも恐れるべきは、自由(liberté)に反することもさることながら、放縦(libertinage)に由来することの方である。(GP.III-265)

民主制は放縦につながるとライプニッツは見えていた。国家の危機を救うためには、国民

の道德性が高まらなければならない、それこそが国民の幸福を保証する国家が安全であることの要になる。君主制は道德性を維持する要諦となるとライプニッツは考えていたのだろう。そして恐らくは、ここにライプニッツの国家の危機管理の思想を見るべきなのかもしれない。

ライプニッツが『君主像』を描いた時のハノーファー国王ヨハン・フリードリッヒはライプニッツのよき理解者であり『君主像』にも適う人物であった。これを含めライプニッツは都合三代の国王に仕えるが、代が替わるたびにライプニッツへの信頼度は下がり、イギリス国王を兼務することになる三人目の国王ゲオルク・ルートヴィッヒはライプニッツに敵対的でした。君主の教育案は実を結ぶことはなかったのである。またしてもライプニッツは理想を実現させることができなかった。

ライプニッツは理想と現実のはざまに生きていた。その理想は「楽天主義」と揶揄されるものであった。この言葉は直接的にはライプニッツの誤解によるものではあるが、言い得て妙ではある。常に希望を失わないライプニッツの姿勢を言い当てているからである。しかし同時にライプニッツは悲観的な面も持ち合わせていた。「人を見る時には常にそのよい面で見なければならない。ただし厄介な問題で一緒にならなければならない場合は別である。その時には用心してかかるのが理に適っている。」(『他人の立場』 Grua.701)ここには政治家ライプニッツの極めて現実的な姿勢が表れている。最悪をさえ見込んでおくことが政治の駆け引きには必要となったことだろう。ただのお人好しではなかった。しかし猜疑心だけの人でもなかった。

おわりに

以上、四つの場面にわたって、「リスク」という視点からライプニッツの仕事を見てみた。第1の計算機は工学的な問題、第2の鉱山計画は自然管理と絡んでいた。第3の保険は、人間の社会生活の問題、最後の国家のあり方は政治の問題である。いずれもライプニッツの実践的な場面での活動に関わるものであった。しかしそのどれもがライプニッツの全体的調和的な思想に裏打ちされていた。リスクはその中で見積もられ、その中で解決の糸口を見いだそうとしていた。ただ、ライプニッツはそのどの場面においても最終的に成功していない。その原因は、それぞれの場面でのリスク管理の問題というよりも、その管理システムを動かす人間のリスクを見積もり損なったことにあった。そのライプニッツの躓きは、あるいは現代のリスク論も共有しているものかもしれない。

註

- (1) 本稿は、2009年3月22日神戸大学で開催された「ライプニッツ研究会」での口頭発表「予定調和の綻び」に基づいており、内容の趣旨は同一だが、口頭形式と原稿形式の違いから、材料と構成は大きく異なる。
- (2) 以下の記述の詳細は、佐々木能章(2002)p.196 以下参照
- (3) 技術面でのライプニッツの研究はゲールラント篇の著作集に見られる。E. Gerland(hrsg.) *G.W.Leibniz. Nachgelassene Schriften physicalischen und technischen Inhalts*, 1906, Olms(rep.)1996 これで見える限りライプニッツは工学者である。
- (4) ハルツ計画については、佐々木能章(2002) 229 頁以下参照。
- (5) Elster (1975) p.88
- (6) ライプニッツの保険論については次の拙稿で詳しく検討した。「共有された悪——ライプニッツの保険論」『横浜市立大学論叢』第46巻人文科学系列第1, 2, 3, 合併号1995年
- (7) 保険の本質をめぐっては専門家の間でも意見がさまざまである。保険制度を近代社会以降に成立したとする考え方からすると、「原始保険」は保険ではなくなる。こうした事情についても前記拙稿(1995)でやや詳しく検討した。

文献

ライプニッツからの引用は次の著作集と略号を用いる。

[A] Akademie Verlag (1900). *Gottfried Wilhelm Leibniz Sämtliche Schriften und Briefe*.

[GP] C. I. Gerhardt(hrsg.) (1875-90). *Die Philosophischen Scheriften von G. W. Leibniz*.

[Grua] G.Grua(éd.) (1948). *G.W.Leibniz. Textes inédits*.

[K] O. Klopp(hrsg.) (1864-73). *Die Werke von Leibniz..*

橘木俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹責任編集 (2007). 『リスク学入門1 リスク学とは何か』, 岩波書店.

佐々木能章(2002). 『ライプニッツ術』, 工作舎.

Elster, Jon(1975). *Leibniz et la formation de l'esprit capitaliste*, Aubier.

〔東京女子大学教授・哲学〕